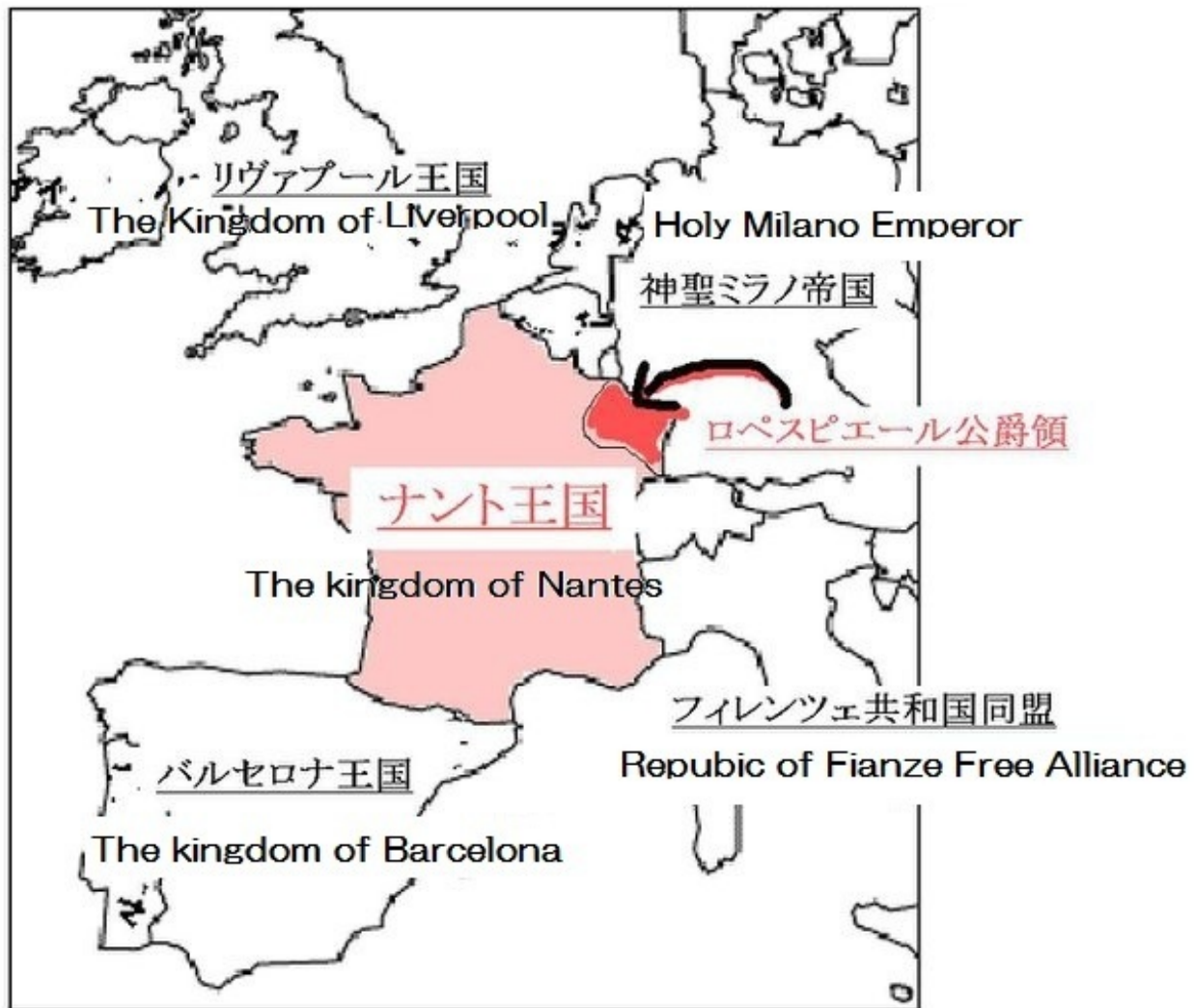


エウロペ地図

Europe



故郷に帰ったアンリはべつにあえて寄る場所などないので、自宅に急行した。

カルッカソムに辿りつくためにいくつもの丘陵地を超えて、馬車は夜を突き進んだわけだ。屋敷の前には夜中だというのに、何台もの二頭立て馬車が屋敷の前に立ち並んでいた。

青年は、御者に扉を開かせることをしなかった。そんな余裕はすでになかったのである。夜空を見上げると星が瞬いている。

ちょうど豪華でもない、あるいは、みすぼらしくもない、ごくふつうの何処にでもある馬車が入ってきた。

「失礼…ム？」

窓が開いて、中から飛び出てきたのは、じつにオシャレな、あるいは、都会的な帽子をかぶった壮年の男性だった。頭部のパーツのなかでもっともアンリの青年の目を引かせたのは、綺麗に整えられた髭だった。八方に、昆虫の触覚のごとく飛び跳ねた髭は、残忍というよりはむしろ真の貴族的な精神を醸し出していた。

しかし、馬車から姿を現すと、それほど服装に費用をかけているとは思えない。一言絵で表現するならば、あくまでもセンスで安い服を着こなしている、のだ。そこいらに蠢いている高位貴族たちよりも、よほどやんごとなく見える。

彼は、アンリに近付くと言った。いささか声は枯れているが、それはそれで品の良さを備えていた。

「もしかして、御嫡男でいらっしゃいますか？」

「はい、アンリです」

誰何するまえに顔を出してきたのは、彼の弟たちだった。

「これは、これは、兄上…」

次男のルイであるが、かつて、アンリが知っている彼ではなかった。当然といえば、当然なのだが、言葉は裏腹に向きだしの敵意が網膜から発射されている。まさか、この場で青い血を爆発させるわけではあるまいな…そう兄に危惧させるほどにこの家の次男は自分の感情を制御すること、少なくとも、それを制御するふりをする余裕すら失っているようだ。

「兄上、おやめになってください！」

「ギョーム……」

アンリは、10年ぶりにみる三男の顔に驚いた。男らしくなるどころか、女のような美貌が際立ってしまったようだ。当時から、彼は母親似であることにコンプレクスを抱いていたが、それがさらに高じているように、兄にはみえる。

つんと澄ました顔から、彼はルイ以上に自分に対して敵意を溜めていることは考える以前のことだろう。

「それで、兄上、この方はどちらですか？」

「アンリ様に仕えている家来でございます」

アンリが口をはさむ前に、髭の男性は自己紹介した。それに怒りを爆発させたのがルイである

。「なんだって？住まう屋敷も正式な爵位も門地も認められていないというのに、家来だと？  
！ギョーム！お前はよくも落ち着いてられるな！」

とつぜん、長男に出奔された貴族の家としては、かなり苦勞をかけたと今更ながらに思う。それが、表現の仕方はそれぞれ異なるが敵意となって表れているのだろう。何処に行こうとも後からついてきて実に鬱陶しい存在だと思っていた二人の弟たちの姿が憧憬とともに蘇ってくる。

そこに割ってきたのは、じつに懐かしい、しかし、あえて耳に入ると心の臓を縮こませる威力を持った声だった。

「は、母上……」

本当にギョームに生き写しだと、アンリは現実逃避を無意識のうちにしている自分を恥じずにはいられない。この場においては謝罪する方法すらみつからない、というシチュエーションなのだ。

ふいに父親の貌が闇に浮かんだ。はたして、自分はどちら似なのだろうか？という疑問がガマ首を擡げる。涙を両目に溜めてアンリを抱擁する母親、それを見るところおもわず自分たちの、激情の持って生き場を失ったように投げやりな顔をする二人の弟、それらをみるにつけて、何もわからないくせにひたすら自由を求めて出奔したおのれを責めたくなった。

その思いは母親の声で途絶させられた。

「あなたさまはどちらかしら？」

「私はアンリさまの家来でございます。ナルボンヌからついてきました」

「……………！？」

アンリは言葉を失った。どうして、この人がそれを知っているのだろう。いま、ここで出会ったばかりなのだ。

何か、巨大な船に無理矢理に乗せられて何処か知らない土地に連れて行かれるような妄想を抱いた。それは運命の視えざる手とでもいうのだろうか？青年には、それが髭の男性によって左右されているように思えてならない。

親類縁者をはじめとする、すべての事情に知悉している関係者の視線は、どれも二人の弟と似たり寄ったりだった。葬礼の席に彼がいることすら不自然だと異口同音にいつている。それを主張しないのは、母親と妹たちだけだった。しかし、上のマリアは十分に兄を知っている年齢だからともかく、顔を覚えているはずのないロザリーヌはどうしたことだろう。兄たちに、さんざん自分の悪口を吹き込まれてきたことは疑いようもない。だが、無邪気な顔からはまったく敵意らしきものが感じられない。

葬礼は、重々しい音楽によって最高潮を迎えるが、重奏な調べも、少年たちの荘厳な歌声も、アンリのころには響かない。そのとき、彼の耳に木霊していたのは、父の遺言に他ならなかった。

「いいか、アンリ、ギョイエンヌ従子爵家を継ぐのだ。そして、伯爵家にお仕えするのだ……………」